

勇気の第一歩

小五

夏休みの暑い日でした。その日は、一年に一度、遠くはなれた祖母の家にとまりに行って、帰ると中のことでした。

電車の中は、とても混み合っていました。わたしと弟と母は、運よく席が空き、すわることができました。弟が、「やっとすわれたね。」と、ほっとしたように言いました。

それから、一時間くらい乗り、あと三十分くらいで着くとき、小がらで、こしの曲がった、八十才くらいのおばあさんが、一人でつえをつきながら電車に乗ってきました。おばあさんは、すわる席を

さがして、きよろきよろと、周りを見わたしていました。

電車の中は、けいたい電話を見ている人、ねている人ばかりで、だれも気付いていませんでした。

わたしは席をゆずりたいけれど、「おばあさんに声をかけたら、周りの人にもじろ見られてはずかしいなあ。断られたらどうしよう。知らない人に自分から声をかけるなんてきんちようする。參觀日だっていつもどきどきするわたしが、知らないおばあさんに声をかけられるかな。だれかが、おばあさんに席をゆずってあげないかな。」と思っっていました。「もうすぐ電車が動き出してしまおう。どうしよう。どうしよう。」わたしの中で、声をかけたい気持ちとはずかしい気持ち、頭の中でぐるぐると回っ

した。

「ガタンガタン。」

電車が動き始めました。すると、車体は、大きく左右にゆれました。そのひょうしに、おばあさんも大きくゆれました。

「あつ、あぶない。」

わたしは、思わず立ち上がりました。となりすわっていた母と目を合わせました。

「わたし、おばあさんに席をゆずる。」

母が、にっこりとうなずきました。

わたしは、どきどきするむねをおさえて、

「おばあさん、席どうぞ。」

と声をかけました。おばあさんは、とてもおどろいた顔をしました。「断られなかな。」また少し不安がよみがえってきました。すると、おばあさんは、

「ありがとう。」

と言って、ゆっくりわたしすわっていた席にすわりました。うれしそうな顔で、ここにこしていました。

何駅か過ぎ、おばあさんはおりていきました。おりるとき、わたしの方に向かって、

「席をゆずってくれてありがとう。」

と、深くおじぎをしてくれました。わたしは、びっくりして、

「あつ、はい。」

と答え、おじぎをしました。

わたしは、喜んでもらえて安心した気持ちと、母に、

「えらかったね。」

と言われてうれしい気持ちでむねがいつぱいになりました。

おばあさんが困っていることに気付

いたことが、勇気を出して声をかける
きっかけになりました。

わたしは、まだだれかの役に立つこと
は、多くはできないかもしれませんが。け
れど、困っている人に気付くことが、わ
たしの勇気を後おししてくれることだ
と分かりました。

これからも、今回のことをわすれずに、
わたしの勇気をさらに成長させていき
たいと思います。